

『説得』における両義性—変革と回帰の狭間で

武田美保子
神尾春香

1. 序論

Jane Austen の小説においては、しばしば社会に対する批判が描かれていないと言われている。しかしながら詳細にテキストを読んでいけば、実はそうでないことがわかる。階級批判・社会批判は戯画化されて提示されることでその辛辣さが緩和されているが、こうした批判はとりわけ最後の小説 *Persuasion* に顕著にみられ、単なるアイロニカルな笑いの対象にとどまらない、当時の社会情勢における微妙な変化が小説に反映されている。

ただ、『説得』においては当時の階級社会は批判にさらされるものの、その調子が最後まで持続するわけではない。というのも、従来の伝統的社会制度を擁護する態度がしばしば見受けられるからで、従来の制度を変えていく意向が示されると同時に、その制度を否定しきれず、伝統的価値観に回帰するような態度も示されるのである。それゆえ本論の目的は、『説得』における「変革（革新、変動）」の動きと、従来の価値観への「回帰（回収）」の動きとの間のダイナミズムを探ることである。それによってこの小説が、急進的なものと保守的なもののどちらか一方ではなく、双方が共存する両義的な作品であることを証明していく。また、不安定で曖昧な要素が物語の行方に関与しているかという点についても注目したい。分析に際しては、階級問題、ジェンダーの問題、そして小説のタイトルでもある「説得」の問題に焦点を当て、それらが二つの価値観の狭間で揺れ動く様を考察する。

2. 時代と階級問題

小説の時代は1914年に設定されている。当時のイギリスにおいては、フランス革命やナポレオン戦争といった世界を揺るがす一連の出来事により、国民の不安が高まっていた。この頃、海軍軍人はナポレオン戦争やトラファルガー沖海戦での活躍により国民からの認知と尊敬を獲得し、社会的地位が上昇していた。オースティンが『説得』以前で描いてきた軍人というのは、*Pride and Prejudice* の Wickham のような放蕩癖のある品行の悪い男や、*Northanger Abby* に登場する General Tilney のような融通の効かない厳格な男など、好ましくない人物が主であった。しかし『説得』に登場する軍人のほとんどが好人物として扱われている。オースティンが海軍軍人を好意的に見るようになったのは、彼女の兄と弟が海軍に士官し出世を遂げるなかで、きょうだい仲の良かったオースティンは彼らから海軍の活躍を聞き、親しみを覚えていたことに起因すると思われる。

一方、それに呼応するように『説得』では、当時の封建的な階級制度の衰退の様子が見られる。伝統的な制度を有する地主階級は、個人の功績などとは無関係に財産や名声を受け継ぎ、安穏とした生活を送る。そしてしばしばそうした生活や制度が、その階級の人々の尊大さと墮落を招くことにもなる。また以前とは違い、地主階級の者が下級の者に圧力をかけることができない様子が描かれる。例えば、ヒロインの父親で準男爵の Sir Walter Elliot は、財政難に陥ったためにケリンチ屋敷を借家にするが、その屋敷の借り手となるのが海軍提督の Croft である。サー・ウォルターは軍人を毛嫌いし、クロフト提督を見下すが、クロフト提督は家を貸してくれたことへの感謝や立派な屋敷を褒めることはしても、特別サー・ウォルターへの敬意を表すことはない。こうした上昇する新興階級と墮落する地主階級の対比の描写を通して、地位が逆転しようという階級の移動性が読み取れるのである。

それでは、ヒロインの Anne と階級との関わりについてさらに見ていくことにしたい。アンは父親の浪費癖のせいで、生まれ育った大切な家から離れなければならない状況に立たされる。家を手放すことへの悲痛な思いが感傷

的に描かれるが、それは停滞した彼女の人生にとっての転機となり、その後の彼女の人生は大きく変動することになる。アンは父や姉から「いないに等しい存在、ただのアンにすぎない」(7)と思われており、家族からこのように扱われることに慣れている。また彼女が家族のためを思っている助言が、父や姉には何の影響も与えないことを認識している。固定された周囲からの評価と、自分のアイデンティティは切り離せないものであり、対外的にも対内的にも、アンは「ただのアン」という存在価値なのである。ケリンチ屋敷という共同体内にいる限りでは、たとえ「ただのアン」つまり「無価値」というアイデンティティだとしても、アンはそれを保持することができた。だがコミュニティを離れるとその個性すら見失ってしまう。そのためアンは「自分の家を離れると何者でもない存在になる」(40)と不安定な心境を呈しているのである。こうしてアンは自身の家庭・階級を離れ、新しい環境での生活を経験することになる。そして物語を通して3つの階級に触れることになる。それぞれの階級と価値観に触れ、徐々に自分に適した居場所と役割を見つけ、アンはいつしか「ただのアン」ではなくなり、周囲から「アンがいなくなったら自分たちはどうすればいいのか」(114)と言われるほど評価されるようになる。

アンが経験する1つ目の階級は彼女自身が属する世襲制階級である。準男爵は厳密に言えば貴族ではないが、爵位や財産を世襲可能である。だが彼らの権力は衰退の傾向にあり、世襲制階級の代表として登場するサー・ウォルターや娘のElizabethは、身分と名声に固執し、尊大と墮落の象徴として描かれる。2つ目は、アンの妹Maryの嫁ぎ先であるMusgrove家に代表される郷紳階級である。彼らは領地や財産を代々受け継ぎ、平凡でありふれた暮らしを送る。メアリーの夫Charlesは狩猟以外には特に趣味もなく、大した特技もない男性で、家庭では妻の我儘に振り回される。善良で良識のある人物だが、海軍軍人らと比較すると冴えない印象が拭えない。彼の両親や妹たちも、善良だがお気楽で退屈なキャラクターとして描かれている。エリオット家はマスコロヴ家と同様にアッパーミドルクラスであり、郷紳階級に分

類される。しかし準男爵家と平凡な地主階級の家という立場上、両者には大きな隔たりがあることから、本論では区別して扱うことにする。3つ目は新興階級であり、この小説では主に海軍軍人であるクロフト提督や Captain Frederick Wentworth、Captain Harville を代表とする。彼らの多くは幅広い交友関係を持ち、家庭にも愛情を注ぐ澁刺とした魅力的な人物として登場する。実力と運がものを言う、活動的で刺激的な暮らしを送るが、常に戦争という危険と隣り合わせの不安定な職業でもある。こうして見てみると、変動していく社会構造のなかで各階級のシステムには善し悪しがあり、どれが最良の階級かは判断することができない。

アンは海軍大佐のウェントワースと結婚するため、最終的には新興階級に属することになる。アンはウェントワース大佐との結婚を機に、エリオット家の希薄な家族関係から脱却することができる。尊敬するクロフト夫妻やハーヴィル夫妻との交際が頻繁になり、また、アンを慕うマスグローヴ家との交際は一層深まると期待される。形式的な社交ではなく、真の意味での交流を手に入れるのである。

だが、海軍軍人との結婚は決して良い面ばかりではない。なぜなら海軍軍人との結婚には澁刺たる生活が待ち受けている反面、その代償として、危険で不安定な未来がつきまとうからだ。

Anne was tenderness itself, and she had the full worth of it in Captain Wentworth's affection. His profession was all that could ever make her friends wish that tenderness less, the dread of a future war all that could dim her sunshine. She gloried in being a sailor's wife, but she must pay the tax of quick alarm for belonging to that profession which is, if possible, more distinguished in its domestic virtues than in its national importance. (236)

このように最終頁では新婚夫婦が戦争によって別離させられる可能性がほのめかされており、不安定な未来が見え隠れする。さらに、海軍軍人は安定した生活を支える基盤としての「家」、「土地」、「財産」を所有することが難し

い。もちろん軍人も自身の家を持つ事はできるが、暫定的に快適な家を築くことはできたとしても、それは代々受け継いでいく屋敷の類ではない。財産を築いたクロフト提督が立派なケリンチ屋敷に住むことができるのもほんの一時的な期間だけで、いずれそこから離れなければならず、屋敷はサー・ウォルターの甥である William Elliot の手に渡ることになるだろう。本文には、軍人との結婚に対する社会的意義を問うような印象的な記述がある。

Of all the family, Mary was probably the one most immediately gratified by the circumstance. It was creditable to have a sister married, and she might flatter herself with having been greatly instrumental to the connexion, by keeping Anne with her in the autumn; and as her own sister must be better than her husband's sisters, it was very agreeable that Captain Wentworth should be a richer man than either Captain Benwick or Charles Hayter. — She had something to suffer perhaps when they came into contact again, in seeing Anne restored to the rights of seniority, and the mistress of a very pretty landaulette; but she had a future to look forward to, of powerful consolation. Anne had no Uppercross-hall before her, no landed estate, no headship of a family; and if they could but keep Captain Wentworth from being made a baronet, she would not change situations with Anne. (233 – 234)

僻っばいメアリーが姉の結婚を素直に祝福したのは、アンの夫が義理の妹たちの夫よりも金持ちではあるが、自分の夫が将来マスグローヴ家の土地を継ぐ地主であるのに対し、アンの夫にはそういった権利がないからである。つまりウェントワース大佐が準男爵にでもならないかぎり、アンとメアリーの立場が逆転することはない。財産はともかく、立派な屋敷や土地は伝統的な制度を有する地主階級の男性との結婚でしか手に入らないものである。これらのことから、海軍軍人との結婚を全面的に肯定することは難しいことが裏付けられる。

『説得』では暗く不穏な調子が描写されており、特にそれは結末において

顕著に表れているため、オースティンの小説の中で最もオープンエンディングの様相が色濃い作品だといえるだろう。上記のような、海軍軍人との結婚における不安要素以外にも、あらゆる点で陰鬱で、不安定な空気が物語に漂っている。男子のいないエリオット家を継ぐのは、サー・ウォルターの甥にあたるウィリアム・エリオットであるが、彼は『説得』において批難の対象となる他の登場人物、例えばサー・ウォルターなどとは一線を画す存在にあたる。エリオット氏は、表向きは誰からも賞賛される好青年として振る舞い、その裏では過去現在共に卑劣な策略を巡らせ、自身の欲望のために他者を不幸へと突き落とす。アンへの愛情だけは利益とは無関係に誠実であるため、一見改善の余地があると思われるが、アンとの結婚を望む一方で、Mrs Clayを愛人にする意思があることは不道徳極まりないことである。最後に化けの皮が剥がれるが、悪事に見合った罰は与えられず、エリオット家の屋敷、財産、準男爵の地位が将来彼のものになる事実是不変である。「ケリンチ屋敷に住むに値しない」(117) サー・ウォルターは無論のこと、エリオット氏も模範的な地主となるかどうかは疑わしい。エリオット家の人々をさんざん愚弄し、アンの親友を不幸に陥れたエリオット氏が最終的にケリンチ屋敷の主人となることは、物語における最大の悲劇だといえるかもしれない。さらに、サー・ウォルターの後妻の座を虎視眈々と狙い、エリオット家の人々に愛想を振りまいてきたクレイ夫人は最終的にエリオット氏の愛人となる。そして、後には準男爵の妻となり、ケリンチ屋敷の女主人の座を掴む可能性があることが示されている。もしそうなれば、クレイ夫人がサー・ウォルターの再婚相手となることを阻止したいと考えていたアンにとって、あるいは、クレイ夫人を寵愛し、信頼を置いていたサー・ウォルターとエリザベスにとって思いがけない惨事であるという他はない。

これらは、「悪人が徹底的に懲らしめられて一件落着」という勧善懲悪型の物語の期待を裏切る展開である。オースティンの小説が教養小説、つまりコンダクト・ブックであるという見方がされることがあるが、¹「分別や礼節を持つ者が報われる」というコンダクト・ブック的解釈は、的外れである。

オースティンは道徳の大切さを説くが、それが報われるとは限らないことを認知し、現実の厳しさや理不尽さを小説という媒体を通して表現していると考えられる。彼女は物語や登場人物から距離を置き、常に冷静に観察している。オースティン特有のアイロニカルな視線は『説得』においても健在である。このようなオープンエンディングの要素は、以下で取り上げる問題においても重要な役割を果たしている。

当時のイギリスは、伝統的社会構造が崩壊を見せ始め、才能と努力が地位を獲得し、その風潮が評価されはじめていた時代である。つまり固定化された社会制度に変化が訪れていたということだ。オースティンは流動する社会の情勢を認識し、見逃すことはなかった。しかし、彼女は魅力的な海軍軍人の快活な生活を描き、尊敬と憧れの眼差しを向けながらも、最終的にはやや保守的な思想へと回帰される。つまり価値観の回帰が起きているのである。オースティンは刺激と平穏を天秤にかけた時、不安定さへの危惧のため、保守的態度を崩すことはできなかった。新興階級に肩入れしているが、その階級システムを手放しに賞讃しているわけではなく、あえてネガティブな側面を提示するところに保守的態度が表れていると考えられる。能力主義社会へと移行しつつあり、新興階級の台頭が目覚ましいが、その成功は常に危険と隣り合わせで、運に左右される。対する地主階級の人々は安穩と暮らしていても「家」、「土地」、「財産」が手に入る。「地主>有職者」という優劣関係が崩れることはなく、出自による優劣が人生に大きく影響していた現実が伺える。不穏な空気が保守的価値観への回帰へと向かわせ、小説における曖昧性や不安定さが当時の揺れ動く社会を反映しているように思われる。

3. アンのジェンダーを巡る問題

Sandra Gilbert と Susan Gubar はオースティンの小説の娘たちの多くが母親不在の状況にあることを指摘した上で、「彼女たちは身の保障のため、家庭から逃れるために夫探しをする」(125) と述べる。当時の女性にとって結婚は死活問題であった。これを裏付けるように、『高慢と偏見』の Charlotte

Lucas は結婚適齢期を過ぎた焦りから、経済的安定と「誰かの妻」という社会的地位を得るために、愛してもいない男性と結婚する。*Emma* に登場するオールド・ミスの Miss Bates が、周囲からからかいと哀れみの目で見られているという例もある。また、結婚市場において女性の美しさ、若さが最大の価値であることはオースティンの作品では再三強調されている。そして、外見で女性を選んだために、不幸な結婚生活を強いられる愚かな男性はオースティンの作品においてはある種定番とも言える登場人物であり、² 彼女はこうした男性を軽蔑し、またこのような傾向に同調する女性もアイロニカルに描いている。このように、オースティンは小説の中で恋愛・結婚事情を描くことで、当時の家父長制社会における女性観を顕在化させている。

『説得』は男性中心主義の家父長制社会の価値観を一方的に押し付けようとする教訓的な小説ではない。夫と対等に渡り合うクロフト夫人や、主体性を誇示する Louisa Musgrove など、男性に服従しない女性の姿が印象的である。ではヒロインのアンはどうだろうか。Cheryl Ann Weissman は、「『説得』は暗く様式化されたおとぎ話のような世界。アンは愛情の無い父と利己的な姉妹からの支配を受けるシンデレラである」(281) と述べ、アンが封建的な価値観を持つ父や姉に従順な娘だと捉えている。しかしテキストには、アンは「身分違いの結婚だと考える父と姉の反対には逆らうことができた」(27) とあるため、ワイズマンの指摘は間違っていると言えるだろう。アンは封建的な価値観を重視する父親の権力に屈することはなく、時に反発する態度を見せる。例えば、学校時代の親友で、今や未亡人となり貧しい生活をおくる Mrs Smith と再会したアンは、変わらぬ友情を感じ、以後も親交を深めようとする。だが誰よりも身分に拘る父サー・ウォルターは、準男爵の娘がどの馬の骨とも分からない人物と付き合うことが許せない。しかしミス夫人との約束の日が、親戚の Lady Dalrymple から招待された日と重なってしまった際、アンは父親の反対を押し切ってミス夫人との約束を優先させる。

身の保障のために愚かな男性と結婚したシャーロット・ルーカスとは異なり、アンは惨めな結婚をするくらいなら独身を貫く覚悟を見せる。従ってギ

ルバートとグーバーが指摘する「安定のための結婚をする」女性像は、アンには当てはまらない。アンは、2章で示した3つの階級に分類される全ての男性との結婚の可能性があるが、チャールズ・マスグローヴやエリオット氏との結婚を拒み、最終的にウェントワース大佐を選ぶ。身分降下を厭わず海軍軍人の妻になる選択をするということは、安定した生活を捨て自ら不安定な社会に飛び込むことであり、アンが強い意志を持つ自立した女性であることが示されている。

いとこのエリオット氏はアンの賢さと美しさに魅了され、伴侶にしたいと考える。彼には将来約束された財産と地位があり、加えて賢さと物腰の良さを持ち合わせている。だがアンの目に映るエリオット氏は、彼の本性が暴露される以前から、どこか信用できない人間だった。

Mr Elliot was rational, discreet, polished, —but he was not open. There was never any burst of feeling, any warmth of indignation or delight, at the evil or good of others. This, to Anne, was a decided imperfection. Her early impressions were incurable. She prized the frank, the open-hearted, the eager character beyond all others. Warmth and enthusiasm did captivate her still. She felt that she could so much more depend upon the sincerity of those who sometimes looked or said a careless or a hasty thing, than of those whose presence of mind never varied, whose tongue never slipped. (151)

安定した地位と財産、そして何よりも「エリオット夫人としてケリンチ邸で暮らす」(150)という魅力をもってしても、彼との結婚は考えられなかった。アンには理性的で常に冷静な男性よりも、「時には軽率な言動をとる、率直さと情熱を持つ男性」(151)の方が魅力的なのである。アンの理想の男性像は保守的の価値観を持つ女性のものとは異なることが見て取れる。

オースティンの作品におけるヒーローとヒロインには、ピグマリオン・コンプレックス的關係性が適合するとの見方もある。³ だが『説得』のヒーローとヒロインの間に、そうした特性は見当たらない。むしろ、特に終盤におい

ては、アンの方がウェントワース大佐を導く働きをする。アンの気持が分からず不安なウェントワース大佐は、アンの間接的な告白を受けて自信を付け、プロポーズをする。ウェントワース大佐の一挙一動に心を揺さぶられる序盤から転じて、徐々にアンの方が精神的優位に立っていき姿が見られるようになる。また、自己過信しすぎたために失敗を経験し、自己認識を強いられるという、これまでのオースティンのヒロインの多くが直面してきた問題を、『説得』においてはヒロインのアンではなく、相手役のウェントワースの方が体験する。そもそもウェントワース大佐は女性軽視の傾向があり、二人の女性からの好意を同時に受け入れたり、本気で結婚する意思がないにも関わらず恋の戯れをするという軽薄な態度を取る。ルイーザの怪我の一件で目が醒めたウェントワースは、ほとぼりが冷めるまでの6週間、彼の兄の家へ逃げ込む。そしてルイーザと Captain Benwick の婚約を聞いた彼は、直ぐさまアンのいるバースに戻ってくる。責任から逃れるような行動を取った彼は非難されてもおかしくないが、アンからも語り手からも咎められる描写は特に見当たらない。また、アンの目に映るウェントワースと、読者の目に映る彼とにはズレがあるように感じられる。というのも、ウェントワースを賛美するアンの思いとは裏腹に、彼の行為からは魅力がそれほど伝わってこないのである。つまりウェントワース大佐は小説のヒーローであるにもかかわらず、ヒロインの相手として物足りない男性であり、語り手による評価が曖昧な人物なのである。アンの目を通して理想化されたウェントワースは、果たして本当にアンに相応しい男性なのだろうかという別の疑念も浮上し、これもまた、アンの将来に一抹の不安を抱かせる要因となる。

アンの態度や価値観が保守的な女性のものとは異なることはこれまでも述べてきた。しかしながら、アンは「進歩的な女性」とまで言い切れるだろうか。彼女はコンダクト・ブックから抜け出してきたように、度々道徳的な言動を取る。またアンは物語が展開するにつれ本来持つ能力を発揮し、周囲に賞讃されるようになるが、その能力が最大限に発揮されるのは「女性的な献身的行為」によるものである。例えば、彼女は相談役として家族や友人の話

に辛抱強く耳を傾けたり、無益な争いを起こさないように周囲に細かな気配りをする。また、怪我人や病人に対して適切な処置を取り、手厚い看護をする。「看護は男性の仕事ではない」(53)と言いつけており、そうした行為が女性としての自分の役割であり美徳であると自覚している。伝統的な女性の役割を拒否せず、むしろ積極的に果す姿勢をみせるのである。アンの奥ゆかしく繊細な性格はまさしく父権的価値観の中で評価されるものであり、従ってコンダクト・ブックで奨励されるような「家庭の天使」としての属性をアンは十分に持っていることがわかる。

ウェントワース大佐はアンのそうした長所を再発見し、再評価するようになる。同時に我々読者も、彼女の女性らしい言動を目の当たりにし、一見すると地味なヒロインの魅力に気付きはじめ、美徳を評価するようになる。家庭から疎外され、失恋経験にいつまでも苦しめられる不幸なヒロインが、他の無鉄砲で自己中心的な女性たちと比較されることで、その賢明で女性らしい長所がより際立つプロット構成になっている。要するに、アンとウェントワースはもちろんのこと、読者や作者でさえも、父権的価値観の枠組みの中で女性を評価してしまっているということが示されているため家長長制的権力関係と無縁ではいられず、男性中心社会の価値観に回収されているといえるだろう。

小説の語りは男性中心社会に批判的でありながら、その反面、そこに回収されているところもある。そして、新しいヒロイン像の可能性が示されているが、伝統的な価値観の枠から完全に抜け出すことはできていない。アンは「進歩的な女性」としての側面を持ちながら、対極である「家庭の天使」の属性を有する、両義的な人間なのである。

4. 「説得」を巡る問題について

小説のタイトルでもある「説得」自体の位置づけについては、批評家たちの間でもしばしば議論されている。⁴ また多くの場合、「説得」に関してオーステインは、読者に判断を委ねる態度を取っているとの見解も提示されてい

る。なぜなら「説得」に対する評価の基準が曖昧であり、最後には「説得」は好意的に受け取られるが、結果次第では完全な誤りだったことがはっきりと示されるという複雑性を孕んでいるからである。そこで最後に、アンはラッセル夫人の「説得」に従って良かったのか、それとも間違いだったのだろうかという問題について考察したい。

アンは8年前ラッセル夫人の説得に応じ、ウェントワースとの結婚を諦める。「危険を回避するため」、「ウェントワースのため」、「女性としての義務を果たすため」に説得に従ったのだから、これで正しいのだと自身を納得させる。アンはラッセル夫人の説得行為も、自身が説得に応じた行為も、「仕方がなかったこと」として受け入れる。8年後、今度は自分の意志を通しウェントワースとの結婚を選択する。ウェントワースと再び結ばれたアンは過去を振り返り、「説得に従ったことで長年苦しんだが、良い結果に終わったのだから、従って正解だった」と思惟する。そして、「もしも8年前、説得に従っていなかったなら、母親代わりであるラッセル夫人の親切な忠告に逆らったという良心の呵責を感じて、もっと苦しんでいただろう。やはり説得に従ってよかったのだ」(230-231)と結論を下す。しかし同時に「ラッセル夫人の忠告が正しかったとは思わない」あるいは「もし当時の自分と同じ境遇の女性に助言を求められたら、別れさせるような忠告は絶対にしない」と語るため、アンの「説得」に対する考えが矛盾している様子が伺える。

アンは病死した母親の親友であるラッセル夫人を慕い、ラッセル夫人もアンに強い愛情を抱いている。父親の存在がそれほどアンに影響を与えないことは3章で分析したが、その代わりに、社会的地位と家柄を何よりも重んじるラッセル夫人が、父権的価値観の体現者として無意識に猛威をふるい、アンを屈服させることに成功している。

Such opposition, as these feelings produced, was more than Anne could combat. Young and gentle as she was, it might yet have been possible to withstand her father's ill-will, though unsoftened by one kind word or look on

the part of her sister; —but Lady Russell, whom she had always loved and relied on, could not, with such steadiness of opinion, and such tenderness of manner, be continually advising her in vain. She was persuaded to believe the engagement a wrong thing: indiscreet, improper, hardly capable of success, and not deserving it. (27)

ただしラッセル夫人の影響力は、サー・ウォルターやエリザベスに対してはほとんどない。周囲から「誰に対しても影響力があり、どんな説得も成功しそう」(96)と評されるが、それは過大評価だといえる。オースティンの小説の世界には、自分が他者に対して影響力があると感じている人物が登場し、彼らが親切心、あるいは偽善で行ったことが問題を引き起こすという展開がしばしば巻き起こる。⁵ そうした関係性が物語の主軸となっているのが『エマ』のEmmaとHarrietの関係である。エマはハリエットとその恋人Robert Martinが釣り合わないと思断し、破談させたことでハリエットに様々な苦しみを与えることになるが、結果的にハリエットは、初恋の人マーティンと結ばれる。この二人の関係は『説得』のラッセル夫人とアンに酷似している。ラッセル夫人は自分の分別に絶対的な自信を持ち、アンたちを破局させたことに後悔はない。彼女はアンとウェントワースの結婚が身分違いであることや、ウェントワースに財産がないことと彼の無鉄砲な性格に対し危惧の念を抱き、二人の結婚が招く危険性を説く。ラッセル夫人はアンに結婚を諦めさせることに成功するが、その出来事が長年アンを苦しめ、最終的にはラッセル夫人の意に反して、反対されていた相手ウェントワースと結婚する。エマと同様に階級意識が高く、判断力が欠けるラッセル夫人は他人を説得する資格があるほど優れた人間ではない。小説の序盤で、ラッセル夫人の唯一の欠点は「立派な身分と階級を重んじる点だけ」(12)との記述があったが、後に「判断力のなさ」と「人間の性質を見抜く能力の欠如」(233)という欠点が暴露される。

先に、ラッセル夫人とアンにハリエットとエマの関係に酷似していると述べたが、両者の関係性には決定的な違いが存在する。エマたちの場合、

二人の関係は一過性のもので、希薄であったため、たとえその関係が崩壊しようとも互いの人生にはさほど影響がない。しかしながらラッセル夫人とアンの場合、母娘ともいえる二人の間には深い信頼関係が成立している。アンはラッセル夫人を信頼していたからこそ助言に従ったのであり、別の誰かのものであれば受け入れなかっただろう。このように、信頼を寄せる相手の誤った判断によって、ひとりの人生が狂わされることへの恐怖が感じられる点や、アンは「説得」を受け入れているものの割り切れなさが残るという点で、ここにもオープンエンディングの要素がみられる。

『説得』の第23章で繰り上げられるクロフト夫人とマスグローヴ夫人の世間話は、アンとウェントワースの婚約から破局までの出来事、あるいは「説得」をめぐる問題に対しての間接的な言及であるとみなすことができる。クロフト夫人とマスグローヴ夫人は過去にアンとウェントワースが婚約していたことなど知りもしないが、二人の夫人と居合わせ、偶然その会話を聞いたアンとウェントワースは、自分たちの過去を思い出して狼狽するというシーンである。二人の夫人は若者の結婚について、「とにかく結婚したがっているなら、すぐにさせた方がいい。長過ぎる婚約で縛るよりは、収入が少なくても二人で苦労させるべき」と言いながらも、「確実に結婚できるという保証のない結婚や、収入の当てが無いままの婚約は危険で愚かだ」(217)と述べている。両者は真逆の主張であるにもかかわらず、夫人たちはどちらにも賛成する。この二つの主張をアンとウェントワースの関係に当てはめてみると、「あの時説得を拒んで結婚しておけば、早々に幸せを手に入れていた」という見込みもあるが、その反面「勢いに任せた危険な結婚が失敗に終わった」可能性と、「説得に従い苦しんだ経験こそが、二人をより強い絆で結びつけた」といえる可能性もあり、いずれも肯定も否定もできない。すなわち、アンは説得に応じて良かったのか、それとも間違っていたのか、作中では可否が下されず、「説得」への評価が曖昧なまま幕を閉じているということになる。

5. 結 論

『説得』以前の作品では、安定した身分の男性とヒロインとの結婚で幕が閉じられていたため、保守的な社会の基でそれぞれの幸せな結末が成り立っていた。それに対し、『説得』ではヒロインが不安定な身分の男性と結婚し、変動する社会に身を投じるため、その幸福な結末は急進的な社会性によって支えられているといえる。しかし革新的方向性への不安を煽るような余韻を残すことで、語り手の中に内在化された保守性があぶり出されているのだとみなすこともできる。そのため一層、この小説が内包する曖昧性が読者に印象づけられることになる。

Raymond Williams はマルクス主義批評の観点からオースティンの小説を分析し、「オースティンは鋭い観察眼を持っていたにも関わらず、その意識は社会階級批判ではなく、保守的な道徳性への追求にばかり向けられた」(113) と指摘している。しかしオースティンが社会階級批判に関心が無かったというのは間違いである。彼女が小説内で描く階級間格差は限定されたもので、彼女が知らない世界、例えば貴族階級や労働者階級には不用意に立ち入らないという特質があり、オースティンは、あくまでも彼女自身が所属した地方地主階級の人々を中心に据え、物語を展開させている。⁶ そのためウィリアムズにとって、オースティンの階級批判は控えめすぎるかもしれない。しかし、特に『説得』では流動的な社会の様子ははっきりと描写されており、階級制度の不安定さが露呈されている。さらに、オースティンが道徳の重要性を説きながらも、道徳的行為が必ずしも報われるとは限らないことは2章で述べた通りであり、ウィリアムズの解釈は、オースティンの小説の本質を捉えきれていないといえよう。

『説得』はコンダクト・ブックにおける道徳的教訓やジェンダー規範を押し付けるような小説では決してないが、従来の観念を否定しきれていない側面もある。それは、父権的価値観にとらわれたエリオット家の秩序に反旗を翻すと同時に、従来の価値観の枠から出られないままに行動するアンの態度からも推測できる。加えて、「説得」が孕む曖昧性が小説の多義性を生み出

している。ラッセル夫人の価値観を受け入れ、説得に従ったアンは、父権的価値観に一度回収されたといえる。8年後、今度は断固とした意志で結婚を決意するが、その相手は家柄が釣り合わない、将来が不安定な職業軍人である。そうした意味では「説得」に左右されたアンの結婚への道のりが、一見、因習的な対応に始まり革新的に終わると捉えることができそうだが、決してそのような単純な構図には還元できない。アンが説得を受け入れようと自分自身を「説得する」過程で、それを可能にしたのは、「女性としての強い義務感」(231)によるものだという。母親代理人の愛情に応えるため、危険な結婚から恋人を守るために自分の感情を犠牲にしたのであれば、この自己犠牲精神は家庭の天使像を彷彿とさせ、ここでもアンの保守的な面が垣間見える。また、変革的な未来へと踏み出そうとするアンの言動の中にも、どこか保守的価値観へ回帰するような心情が絡み合っている。

オースティンが小説において急進的、保守的どちらの立場を取ったかを断言することはできない。変革と回帰が表裏一体となり、どちらの側面も備える結末となっている。従って『説得』は、急進的価値観と保守的価値観の両者が共存する、きわめて両義的な作品であると言えるだろう。

註

本稿は京都女子大学英文学会2014年度大会（2014年11月1日）において口頭発表した原稿を加筆し訂正を加えたものである。

- 1 この点については、Margolis や Fritzer に詳しい。
- 2 典型的な例として、『高慢と偏見』のベネット氏や『マンスフィールド・パーク』のサー・トーマス・パートラム、『分別と多感』のパーマー氏が挙げられる。
- 3 ナイトリーとエマ（『エマ』）、ヘンリーとキャサリン（『ノーサンガー・アビー』）、エドモンドとファニー（『マンスフィールド・パーク』）の関係などを参照。
- 4 この議論については、Molan や Moon を参照。
- 5 この点は、イザベラとキャサリン（『ノーサンガー・アビー』）、ダーシーとビングリー（『高慢と偏見』）の関係性に共通する。
- 6 オースティンが姪のアンナに宛てた手紙には「田舎の3、4つの家庭こそが小説の恰好の題材となる」と書かれている。

参考文献

- Austen, Jane. *Persuasion*. London: Penguin, 2003.
- Fritzer, Penelope. J. *Jane Austen and Eighteen-Century Books*. Santa Barbara, California: Praeger P., 1997.
- Gilbert, Sandra and Susan Gubar *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale Univ. Press, 2000.
- Le Faye, Deirdre. *Jane Austen's Letters*. Oxford and New York: Oxford Univ. Press, 1995.
- Margolis, Harriet. "Janeite Culture: What Does the Name 'Jane Austen' Authorize?" Ed. Gira Macdonald and Andrew Macdonald. *Jane Austen on Screen*. London: Cambridge Univ. Press, 2003.
- Molan, Ann. "Persuasion in *Persuasion*." Ed. Harold Bloom. *Jane Austen*. New Haven and Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1986.
- Moon, E. B. "'A Model of Female Excellence': Anne Elliot, Persuasion, and the Vindication of Richardsonian Ideal of the Female Character." Ed. Harold Bloom. *Jane Austen*. New Haven and Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1986.
- Weissman, Cheryl. A. "Doubleness and Refrain in Jane Austen's *Persuasion*." Ed. Patricia Meyer Spacks. *Persuasion*. New York and London: W. W. Norton, 2012.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. London: Hogarth Press, 1993.